

# 佐藤春夫『南方紀行』の中国近代（一）

——作家が見た軍閥割拠の時代——

河 野 龍 也

## 一 はじめに

デビューしたばかりの佐藤春夫が、台湾南部打狗（現高雄）で歯科医を開業していた東熙市（新宮中学同窓）に誘われて、基隆港から台湾に上陸したのは大正九（一九二〇）年の七月六日。同年十月十五日に台湾を離れるまで、約三ヶ月半におよぶ「外地」での体験は、やがて春夫文学に大きな実りをもたらすことになった。台湾先住民民族研究の魁であった森丑之助や、民族運動家の林猷堂らとの出会いにより、春夫の台湾紀行には、日本の統治政策の危うさを見据えた柔軟な批評意識が存在する。そのため、特に台湾文学研究の分野では、九十年代以降春夫の「台湾もの」

の再評価が急速に進んできた。だが、台湾対岸の厦門・漳州における春夫の初の「外国」体験を描いた紀行文『南方紀行』（大11・4、新潮社）については、同じ旅行の産物であるにもかかわらず、ほとんど言及されることはない。正確な旅程も訪問先についても具体的には明らかにされておらず、旅の実態は今もって謎とされる部分が多い。

大正中期、いわゆる「支那趣味」の高潮の中で、作家間には中国旅行が流行していた。徳富蘇峰（大6）、谷崎潤一郎（大7）、芥川龍之介（大10）といった著名作家が、春夫に前後して相次いで中国を訪れている。だが、彼らの訪問先は、いずれも北京・天津・漢口・南京・上海などの大都市に決まっていた。これは、当時の中国の長距離旅客運搬が、南北は京漢鉄道と津浦鉄道、東西は長江の水運に

限られていたからで、春夫<sup>注1</sup>のように陸上交通の未発達な僻地の小都市を訪ねた例は極めて珍しい。その上、案内人が打狗の東家で会ったばかりの鄭という中国人だったこと、渡航先には一人も知合いがいなかったこと、五四運動や護法運動の勃興により中国の政情が極めて不安定な時期にあったことなどが、春夫の旅をますます異質なものになっている。春夫の体験は、すでに一通り西洋化が済んだ巨大租界の中で、近代的なホテルに泊まり、旧知の日本人に案内されて旅行した他の文学者とはかなり違っている。『南方紀行』のもとになった体験は、言わばより生々しいレベルの「異文化体験」だったのである。

『南方紀行』の情報源は、案内人の鄭と交わした英会話に基づくものと一応は考えられる。だが、簡単な会話では到底把握できないような複雑な内容も含まれていることに注意したい。鄭以外に日本人か、巧みに日本語を操る現地人の存在が想像されるゆえんだが、そのような人物との交流は記述の表層には現れてこないのである。だとすれば、『南方紀行』には、書きもられた（あるいは意図的に伏せられた）事実が意外にも多いのではないか。また、予備知識を持たずに旅行した春夫は、当然のことながら様々なレベルでの盲点をかかえこんでおり、それがこの旅行記に曖昧さをもたらしている場合も少なくない。

この謎の多い旅行に関し、稿者は国内における文献調査に加えて、二〇〇八年二月と二〇一〇年八月の二度、廈門および漳州で現地調査を行った。今後数回にわたって調査の具体的な成果を公表する計画である。本来ならば旅行経路の順を追った『南方紀行』の章立てに沿って考察を進めることが望ましいが、資料整理と公開手続の都合により、最初に第五章「漳州」を中心に取り扱いたい。調査の進展により新たな事実が判明した際には、適宜増補訂正を掲出することとし、また注釈情報の解説を主とした回をも設けて、春夫の初の中国旅行の実態把握に寄与したい考えである。

## 二 漳州訪問の経緯

大正九年七月二十一日、東家の書生の鄭を案内役として打狗を出発した佐藤春夫は、翌二十二日朝、金門湾に浮かぶ廈門島に到着する。その後約二週間、華僑の出港地として有名な路地の町廈門と、その市街地からわずかに一衣帯水を隔てた共同租界の鼓浪嶼（現在では世界遺産に登録されている）、そして本土の集美と称する漁村に建設されつつあった華僑向けの私立学校（集美学校）などを見学し、旅の終盤は内陸都市の漳州に二泊した。『南方紀行』初版



本によれば、漳州への出発日は、〈廈門に於ける第十二日  
——旧暦六月十七日〉。これは新暦八月一日に相当するが、  
この日は廈門上陸から数えて第十一日目に当たり、検証が  
必要とされる所である。<sup>注2</sup>

漳厦鐵路が内戦以来営業停止中であつたため、漳州までは水運を利用するほか手段はない。金門湾を陸に沿つて小蒸気で進み、龍溪（九龍江）河口の石碼からは、手漕ぎの川船でこの福建省第二の大河を溯上する（付図参照）。作中の記述によれば「一昨々日」、つまり七月二十九日（旧六月十四日）、この小蒸氣に乗り遅れるという失態があつたため、春夫の漳州見物には三日の遅延が生じたらしい。<sup>注3</sup>

その結果、八月二日を限度に台湾に帰る鄭にかわつて、急遽新しい通訳を手配する必要に迫られたことになる。春夫は廈門市内の「旭瀛書院」（現地の台湾籍民を対象とする小学校）を訪問し、〈岡本氏〉（当時院長だった岡本要八郎）から徐朝帆・余錦華という二人の台湾籍の教師を推薦された。打狗を出発する際に森丑之助が送ってくれた紹介状が、ここで役立ったものと推測される。結果的に見ると、この想定外の計画変更は『南方紀行』にとって大きな打撃となつた。というのも、春夫の手帖に詳細な観光案内を残して行つた事情通の鄭とは異なり、新しく通訳についた二人は、漳州には全く不案内で、日本語にもさほど習熟して

いなかったからである。当日はこの二人に加え、台北医学校出で漳州に開業し、陳炯明<sup>ちんけいめい</sup>の下で一等軍医を務めていた許連城も同行することになった<sup>注4</sup>。

これほどにまで漳州見物に期待していた理由を、春夫は〈廈門に着いた日以来、どこでも噂を聞かせられる漳州の土地を、又、そこで画策をしてゐる陳炯明の仕事を見た〉<sup>い</sup>ためだと記している。広東<sup>えう</sup>（粵）の軍閥・陳炯明が「援閩粵軍」と称して福建省<sup>ふくけん</sup>（閩）の漳州に駐留していた事情については、辛亥革命以後の近代中国史を押さえておく必要がある。

一九一二（明治四十五・民国元）年一月に成立した中華民国は、その後ほどなく北洋軍閥の支配下に組み込まれ、大總統袁世凱の専横が始まる。中国同盟会の功労者・宋教仁は暗殺され、これに抗議する孫文・黃興らの第二革命も挫折した。袁は帝國主義列強と結び付き、国内利権を切り売りすることで財政基盤を確保、民国四（一九一五・大正四）年十二月には帝政を布告するに至る。雲南護国軍の蔡鍔<sup>さいかく</sup>をはじめ西南勢力がこれに反発、相次いで独立を宣言し、ここに軍閥割拠の状況が出現した（第三革命・護国運動）。翌年、やむなく帝政を解消した袁世凱はほどなく病没。これに替わって北京政府の実権を握った段祺瑞もまた、張勳の復辟（清朝復活運動）を平定した後に反動化、主権在民

の建国理念（臨時約法）を無視して独走し始める。孫文はこの混乱状況を打破するため、民国六（一九一七・大正六）年七月、再び革命を唱えて広州で護法運動を開始する。南方の有力な反政府系軍閥である唐繼堯の雲南軍（滇軍）と、陸榮廷・莫榮新の広西軍（桂軍）の軍事力を頼みに広東軍政府を立ち上げ、九月に大元帥に選任された孫文は、同年十二月、北軍（北京政府側）の拠点・廈門を攻撃するために早速援閩粵軍を組織した。その総司令に任命されたのが陳炯明である。

つまり、史実が明らかにする所によれば、陳炯明が福建省に兵を進めて来たそもその理由は、段祺瑞派の福建督軍・李厚基を討伐せよという孫文の意向によるものであった。南軍（援閩粵軍）ははじめ苦戦するが、林季商（諱資鏗、号祖密）ら孫文支持者の活躍や浙江軍（北軍援軍）の一部が南軍に投じたこともあって、翌年五月までに陳炯明の軍勢は福建西南部をほぼ制圧する。だが、後述する軍政府内部の状況の変化により、六月には李厚基と和平協議に入らざるを得なくなり、停戦ラインを確定の上、民国七（一九一八・大正七）年八月、陳炯明は「閩南護法区」<sup>注5</sup>と名付けた占領区の首府・漳州に進駐した。陳は臨時約法の精神を尊重し、漳州の都市改造・社会改革に着手する。

この間の事情を春夫の『南方紀行』はどのような形で要

約しているのだろうか。いま最も注目すべき記述は次の箇所にある。

陳炯明は広東の人である。初め、兵を養つて故郷の広東で勢力があつたが、広西軍の莫榮新の威力に押されて陳炯明はどうしても広東を逃げ出さなければならなかつた。そこで、陳炯明は自分の軍隊を率ゐて福建省の方へ落ちて来たのである。さうしてその軍勢を自ら援閩粵軍（福建を援ける広東軍）と号した。勿論彼自身が総司令である。一たい彼は何の為に兵を擁してゐるかといふのに、彼の目的とするところは現に不統一に大きな中華民國を聯邦共和国にしよう。即ち支那に於て各々異つた方言を使ふ民だけそれぞれに独立した政府を形作つて、その地方的な独立政府の聯邦を中華民國としよう。さういふのが彼等の理想なのである。

『南方紀行』は必ずしも歴史叙述を目的にしたものではない。が、仮にこれを歴史的文献として見た場合に問題になるのは、何よりも護法運動の中心にいた孫文の存在が見過ごされている点である。文中の「聯省自治」は、広東福建の安定を最優先に考える陳炯明の立場から出たもので、中国全土の武力統一を主張する孫文とは立場を異にしている。この革命路線の違いが最終的に両者の埋めがたい溝となり、民国十一年（一九二二・大正十一年）六月、陳炯明は

突如孫文を砲撃する。その結果、中国統一は蒋介石による民国十七（一九二八・昭和三年）年十二月の北伐完了まで遅延することになるのだが、護法運動の初期段階において、陳炯明の広東軍は孫文が信頼できる唯一の直轄軍だった。

というのも、援閩粵軍が福建省で進撃を続けていた頃、両広（広西・広東）の完全支配を狙う陸榮廷は、四川に向けて勢力を築きつあつた雲南軍の唐繼暉と共に旧国民党政学派の岑春煊（せんしゅんけん）を担ぎあげ、勝手に北京政府と停戦交渉を始めてしまつたからである。孫文は広東軍政府が単に軍閥間の利害調整の場と化したことに憤慨し、民国七（一九一八・大正七年）五月、失意のうちに広州を後にしていた。

陳炯明が李厚基と停戦協議をせざるを得なかつた理由もこのことにかかわっている。しかし、やがて民国九（一九二〇・大正九年）年初頭、軍政府内で雲南軍と広西軍の間に衝突が生じると、これを巻き返しの好機と捉えた孫文は、「閩南護法区」に居座りを決め込む陳炯明に対し、上海から再三広州反攻を催促する電報を打ち、使者を派遣した。軍費の不足を理由に先延ばしを続けていた陳も、広東軍政府の莫榮新の部隊が福建省境を侵し始めると、八月十六日、これに促されてようやく重い腰を上げることになる。<sup>注6</sup> 春夫の漳州訪問からわずか半月後のことであつた。

以上のように、当時の福建省には中国近代化の歴史の一

場面が繰り広げられていたのだが、『南方紀行』では、粵軍の入閩も広東への反攻も、ともに陳炯明と莫榮新との私闘という側面から描かれるにとどまっている。〈陳炯明とはどんな人か。その人たちが漳州で何をしてゐるか〉という関心から記述が始まる以上、「漳州」を書きあげる春夫の努力は専ら、〈山師的な陳の人となり<sup>注7</sup>〉（大久保典夫）の描出に注がれたことになる。〈毀誉相半〉する謎の人物を追って内陸都市に潜入し、漳州の新公園でそれらしき人物に出会うも確証を得ぬままに帰還するという叙述の骨格には、探偵小説的な物語化の論理が働いていると見るべきであろう。その点、廈門市街の怪しげな印象を、阿片吸引者の台湾商人（陳）のイメージに集約して見せた第一章（廈門の印象）のタイトルが、初出では「探偵小説に出るやうな人物」（『野依雜誌』大11・11）となっていたこともここでは思い合わされる。春夫にとって俯瞰的・客観的な状況説明はむしろ二義的なものであり、事実関係の精査よりも謎めいた人物の造形が『南方紀行』の主眼となっているのである。

### 三 安海事件の実情

さて、近代中国を一種の戦国絵巻として描き出す「漳

州」の中で、一つの大きな山場と言えるのが「安海事件」を紹介した一節である。以下、『南方紀行』の記述に基づき、春夫が理解した限りの「安海事件」の顛末について最初にまとめておく。

廈門近郊の安海で徳政を布き庶民の人気を集めていた〈許督蓮〉は、〈勝手に福建を荒らしてゐる〉広東軍の陳炯明に密かに不快な思いを抱いていた。彼はかつて袁世凱時代に廈門で北京政府の秕政を鳴らした新聞社の社長で、南軍側の人間である。福建人の自立を目指す許は、〈どういふ考か喜んで陳炯明を迎へ〉た地元の徳望家・林季商に密使を送り、陳を見捨てて安海に来るよう呼びかけた。だが、〈軽々しく土豪と協力して土匪の頭と誤解されるやうなことがあつては、名譽ある父祖に対して申訳がない〉と林の姿勢は慎重であつた。早春の頃、避難民を満載したジャンク船が続々入港するのに驚いた廈門市民が尋ねると、〈名もない烏合の衆〉の〈雲南軍〉が大挙して安海に侵入し、今市街掠奪戦の最中だという。敵は策謀をもって一度退却し、安心した安海住民が再度〈許督蓮〉を迎え入れたのを見ずまして大軍で再来、三日にわたる市街白兵戦で安海を破壊し尽くした。〈死者三千、安海に処女なし〉と報道される惨劇の中で、独身の許が孝養を尽くしていた八十になる老母にも残酷な暴力が振るわれたらしい。一連の安海蹂

蹕は兵力や軍資の点から見て陳炯明が裏で操作していることは疑いなく、密使の一件を察知した陳は（雲南軍）を使喚して、本来同志である筈の許に陰湿な報復をした——とここまでが『南方紀行』の記述である。

これを史実と照らし合わせてみたい。局地的な戦闘であるためか、軍閥割拠時代の通史の中に「安海事件」の記述はほとんど見出せない。そこで当時の廈門領事館及び台湾軍参謀部の諜報筋が纏んだ情報に当たってみると、事件の主役として陳炯明と方声濤の二人の名前が浮上する。

雲南軍の指揮下を離れて広西軍莫榮新の下にいた方声濤は、民国（大正）八年春に廈門の北、永春方面（安溪・安海・德化附近）において援閩粵軍第一支隊の許崇智（陳炯明の腹心）を駆逐した。方声濤は所属部隊（福建軍）を「靖国軍」と称してここを占拠したが、軍資の基となる樟脳・阿片栽培区域の所有権や、軍の提携条件を巡る齟齬から地元勢力の宋淵源（閩南軍）・林季商（援閩粵軍第二預備隊司令）の二人と確執を生じる。これを見澄ました陳炯明は即座に軍事介入を開始、宋・林を援護して方声濤を安海附近にまで追い詰めた（十二月二十七日在廈門領事藤田栄介報告<sup>注8</sup>）。この行動は単なる復讐という以上に、福建の民心を掌握している三者が、地元の反陳勢力を糾合して粵軍の脅威となることを未然に防ぐ意味合いもあったかと考

えられる。

一方で方声濤は、今や孫文―陳炯明ラインの敵対勢力となった軍政府に救援を依頼、海軍司令・林葆懌が広西軍及び雲南軍旅団の安溪投入で応じる（大正九年一月十二日同報告<sup>注9</sup>）。この間安溪の戦線では、宋淵源・林季商に朱得才（粵軍第二軍混成第四旅団）が加わるも、方声濤部下の楊持平がしぶとく持ちこたえ（二月二十日同報告<sup>注10</sup>）、三月下旬に至つてついに本隊の許崇智が永安から出動。許崇智は即座に永春を奪還、また部下の李炳榮・援閩浙軍の陳肇英も安溪を占領。勢いに乗る陳炯明は朱得才に下令して雲南軍を安海の地に追い詰めた。安海の許卓然（閩南靖国軍第二路司令）は形勢不利と見るや夜間廈門に逃亡し、方声濤はもとより粵軍の大量投入に圧倒された宋淵源までもが詔安に避難したため、粵軍はあつけないほど簡単に安海を占領した（台湾軍参謀部四月二十一日報告<sup>注11</sup>）。さてこの先が問題の「安海事件」である。安海には靖国軍の敗残兵が粵軍の隙を狙つて潜んでいた。

〈安海附近ニ於ケル敗残ノ靖国軍ハ四月十四日午後二至リ粵軍ヲ攻撃シテ之ヲ退却セシメシモ同夜十時頃粵軍ハ南安方面ヨリ大軍ヲ以テ安海ヲ攻撃シ砲火ヲ注キタル為靖国軍ハ敗退シ人民ノ死者千余人ニ及ヘリ〉（同地現下ノ状況ハ粵軍三指揮官、李炳榮、徐瑞霖（許軍長ノ部下）及潘雨

峯（粵軍二属スル土匪操縦者）ノ勢力争ヒヲナシ指揮統一セサル為実員三營ヲ有シナカラ四月十四日僅二百名ニ足ラサル靖国軍敗残兵ノ為ニ安海ヲ奪還セラレタルモノニシテ後ニ増援ヲ得テ約一時間ノ後之ヲ回復シタルモ粵軍ハ安海回復ノ後掠奪其他頗ル残忍ナル行為ヲ敢行セリ」（五月十一日同報告<sup>注12</sup>）。圧倒的な勢力を恃んで安海を易々と陥れた粵軍が、内輪揉めしている所を敗残兵に攻められて動揺し、逆上の結果、安海蹂躪に及んだというのが事の真相であるらしい。

この狼藉により粵軍が安溪・安海附近の住民感情を甚だしく害したことは春夫の書いた通りで、陳炯明は事件後の五月五日、漳州にあった陳肇英（浙江軍）を該方面に派遣、現地に不名譽を残した粵軍に代わって彼らに守備を委任することにした（同<sup>注13</sup>）。また、陳は戦功のあった林季商を粵軍第九支隊司令へと格上げしたが、林は広東出身の度し難い兵卒に不快を覚え、別に〈親兵隊〉の組織を願ひ出て六月三日に安溪へと赴いている。これは方声濤の勢力が除去されたことで広州反攻の可能性が高まる中、粵軍帰粵後も福建にとどまろうとする林の態度表明とも見られる動きであった（台湾軍参謀部六月一日報告<sup>注14</sup>）。『南方紀行』はこの間の事情を、〈林季商は、陳炯明も亦土匪と何の選ぶところもなかつたのを観て、表面的には陳氏と何の齟齬もな

いけれども今は漳州軍の参謀といふ名を空しくして漳州に近い徳化の地に手兵を蓄へて隠れて居る。この粗雑な頭腦ではあるかも知れないが、一種高貴な心情を持った人はこの地方の不穩を彼一身の責に帰して、徳化が由来磁器の産地であるといふので陶窯を設けて古風な手法で製陶を試みたりして、身を風流に托する方法で、やつと心中の憂悶を遣つてあるとも言はれて居る〉と解説しているが、事件を境に林が陳炯明と一線を置き始めたことは、史料に照らしても確かなようである。

以上の情報から、『南方紀行』の記述を検証すると、春夫の事実誤認が少なくとも二点明らかになる。安海攻撃の主体は援閩粵軍の主力部隊であつて、雲南軍は逆に軍政府派遣の援軍であつたこと。そして陳炯明の軍事行動の動機は、許卓然（許督<sup>注15</sup>連）の林季商に対する造反の慫慂（真偽未詳）などよりもずっと広い背景を持つていたことである。実際の目的は莫榮新の福建における拠点（方声濤）を潰すことであり、かたがた護法運動中に組織された土着の民軍（宋淵源・林季商）をも分断して、閩南における陳の独裁体制を確立しようとするものだった。歴史的に見れば、これは孫文の護法運動の理念から、権力志向の陳が逸脱を開始する過程を刻んだ事件と目されるわけだが、当時の福建住民にとっては、二人の革命路線の対立よりも、地元のみ



軍を迫害する余所者という観点から陳への反感が募っていたことは想像に難くない。雲南軍を裏で操って味方軍を追い詰め、故意に侮辱や弑逆を恣にするというエピソードの中には、実際より以上に陳炯明を奸智に長けた策略家として貶める意図が介在している。廈門地方での報道や民間の噂話を情報源とする春夫の記録は、そうした地元の輿論に強く影響されたものだったのである。

#### 四 開明軍閥・陳炯明

もともと、春夫は陳炯明の「開明的」な側面を紹介することも忘れてはいなかった。本来漳州見物の目的は、〈そこで画策をしてゐる陳炯明の仕事を見たい〉という所にあったからである。こうした陳への期待は、彼が廈門鼓浪嶼の資産家・林木土の邸から、紀州新宮の父親に宛てて書いた手紙の中にも現れている。〈明日は漳州と申すこの川上二時間のところを見物いたします。ここは南軍が大活躍の地で、市区改正やら公園建設やら新思想の鼓吹やらで人氣を専ら集中してゐる場所です〉（七月二十七日付、佐藤豊太郎宛<sup>注16</sup>）。

当時陳の本拠地であった「閩南護法区」の首府漳州は、〈閩南的俄羅斯<sup>注17</sup>〉（福建南部のロシア）と呼ばれ、中国人自

身の手で社会主義政策が実現されつつある都市として内外の注目を集めていた。台湾軍参謀部は入漳後わずか一年半の間に達成を見た陳炯明の改革を次の十項目に分類している（大正九年三月四日報告<sup>注18</sup>）。①警察（事務改善、監獄新築）、②市区改正（都市改造、護岸工事）、③買菜場ノ設置、④衛生（清掃車・公厕の導入、地方衛生会による貧民の医療救済、私娼一掃のための遊廓設置と検徴実施）、⑤教育（教育局設置、留學生のフランス派遣、夜学校・図書館新設）、⑥殖産興業（造林・樟腦採取の奨励、農業学校・工読学校の設立）、⑦軍隊ノ教育（觀兵式挙行・軍官講習所設立）、⑧交通（郊外公路建築）、⑨娛樂機關（漳州公園、演劇場、美育俱樂部設立）、⑩新思想ノ宣伝（思想書の公開・販売、白話報「閩星」「閩星日刊」の発行）。この報告書は陳の業績を、〈如何ニ彼レカ漳州ニ其根拠地ヲ作成スルニ努力シアルヤヲ窺知スルニ足ルモノアリ〉と評価しながら、〈但シ之カ為地方ニ対スル收斂ハ往々酷ニ過キ怨嗟ノ声ヲ耳ニスルコト蓋シ已ムヲ得サル所ナリ〉として、過酷な税を課す強権的な改革に住民の不満があったことも伝えている。

この資料に照らし合わせてみると、『南方紀行』で春夫が言及した項目は、①と⑦を除く八項目にまで及んでおり、漳州の街づくりに関して、春夫の掴んだ情報が極めて正確

だったことが見えてくる。特にユートピア小説「美しき町」(『改造』大8・8・12)の作者である春夫にとって、

②の都市改造は興味の中心にあつたらしく、(この石甃が問題の石甃なのであらう。これの一丈に就て両側の家々が銀二十五円づつ支払はせられた——精々が五円ぐらゐの仕事に五十円も金をとつたと厦門で噂をしてゐたのはこれの事であらう)と、理想都市の実現にかかる現実的なコストまでが事細かに記してある綿密さである。このデータは台湾軍参謀部の報告とも正確に一致する。<sup>注19</sup>

では、厦門において事前に情報を耳にし、強い興味を覚えて漳州を訪れた春夫は、陳炯明の施政を見してどのような感想を抱いたのだろうか。策略家としての陳のイメージを払拭する契機がこの漳州見物には含まれていたはずなのだが、結論から言えば春夫を待っていたのは落胆である。川船の乗継ぎのため漳州の玄関口に当たる石碼に上陸した春夫は、陳の改革により三倍幅の道路と公園ができた新造の街を見て早くも次のような感想を漏らしていた。

〈両側の家は厦門の市街に見るやうな汚いしかし或る重厚な氣持を帯びた煉瓦造ではなく、新らしく白く薄つぺらな洋館まがひの、小さな活動写真小屋のやうな感じのものだ。この意味ではたしかに町は悪くなつたであらうと思へる——少なくとも亡国的の美觀がなく

なり、さればと言つて新興の勢力がごく稀薄なあるかないか程のマヤカシものだから心細い〉

〈この公園なるものを見ただけで、氣の早い話だが、私は陳炯明が少し嫌やになつた——それまでは唯單純な好奇心だけで、好惡の念はちつとも雜つてはゐなかつたのだが、やはりこの男も山師かも知れない。人格そのものが山師でないなら、少くとも今現に漳州でしてゐる仕事といふのは純粹な仕事ではないかも知れない。旅の者である私は旅の者相應な無責任でもつて、少々早まるかも知れないが毀譽褒貶相半するこの人の噂の、毀と貶との側へ極く微量の分銅を置かうかと用意してゐる。〉

この第一印象は漳州に入つてもほとんど修正されることはなかつた。春夫の漳州到着日の足取りは、許連城の宏仁医院に荷物を預け、許の長男の案内で新設の道路(②)から漳州公園(⑨)に至り、旧城東門の公設市場(③)を見て妓楼の一廓(④)を見学、その後公園で軍幹部と思われる一行に出会い、孔子廟(文廟)を通つて宏仁医院に戻るというものであつた。援閩粵軍の一等軍医にして〈漳州びいき〉の立場にあつた許連城は、長男の少年に指示して陳炯明の改革の成果を誇示させるつもりがあつたのだろう。案内されたのはほとんどが陳の街づくりの要所だつたこと

が分かる。もちろんそれは春夫自身の要望でもあったのだが、〈家々は石碼で見たやうな安普請で、もう落成してゐるのに何だか未だ普請中のやうに落ちつかない。先づ言つて見れば、田舎の郵便局と齒医者の家と都会の床屋の家と活動写真館とがその一族を引きつれて立ち並んでゐるといふ有様である〉、〈先づ公園を見せた童児は、公園を抜けて東門に近い公設市場を見せる。だが私はそんなものを見たつて何にもならない〉と言う。せっかく意を尽くした少年の案内も、春夫を失望させるだけだったらしい。もつとも通訳であるはずの台湾人教師に、〈あまり日本語で話をしてない方がいい。皆、日本人を嫌つてゐるから〉と迷惑顔をされ、少年の説明を全く理解できずに連れ回されるだけの市内見物では、興味が持てないのも無理はなかった。

その一方で、春夫が目を惹かれるのは、陳炯明新政ツア―とは無関係な〈寄り道〉先で見た一つの光景だったことに注目したい。それは孔子廟——宋朝に朱熹が講義を行つた由緒ある儒学の街・漳州の文化的中心——が、今や見る影もなく荒廃している様子であつた。〈廟の本で出来た部分は手のとどく限り剥ぎ砕かれてゐた。冬ごもりのうちに兵卒たちがここへ集つて来て、焚火の料にしたのに相違ない。現に今も、七八人円居して夕明りのなかで夢中になにかしてゐる——多分博奕に耽つてゐるのであらう〉。かく

して後に打狗に戻つた時、春夫が父に宛てて再びしたためた手紙のニュアンスは、漳州に行く前とはよほど違うものになつていた。〈支那は、厦門と漳州と、集美といふところを見物いたしました、漳州は南軍の陳炯明といふ將軍が新政府を始めて（一年ばかり前から）新思想で革命的のやり口が大に問題になつてゐます。古いものはどんどん破壊する主義らしく、惜しい建物などがめちやめちやになつてゐます〉（八月十一日付、佐藤豊太郎<sup>注21</sup>宛）。本来春夫は、伝統的な景観や文物を見るために漳州に出かけたのではなく、改造と社会改造を〈新興の勢力がごく稀薄なあるかないか程のマヤカシもの〉としか感じられなかつた春夫は、そうした〈マヤカシ〉の代償に破壊されて行く〈亡国的の美観〉に却つて哀惜の念を募らせる結果となつた。

総じて「漳州」の章から窺われるのは、中国の内発的な近代化に対する強い関心と、その近代化についての抜きがたい懷疑の眼差しとである。それは第三章の「集美学校」（『新潮』一九二一・九）にも典型的に表れていたはずである。次にこの章に簡単に触れながら、「漳州」に露出してゐる春夫の発想様式を整理しておきたい。

## 五 近代化への懷疑

集美は廈門島に向き合う本土の小さな漁村で、民国（大正）二年、南洋で財を成した華僑の息子・陳嘉庚と陳敬賢の兄弟が、私財百五十万円を投じてここに華僑の子弟向け教育校である集美学校を建設した。現在でもこの地区には各種学校が林立し、「集美学村」という広大な学園都市を形成している。春夫が訪れた民国（大正）九年には、翌年の廈門大学開学に向けて学生の募集が始まっており、廈門市街南郊の古刹南普陀寺院の附近には、大学新校舎の建築予定地が決まっていた。（財を吝んで公共的な事業には決してそれを費さうとはしない支那人としては、ただ地方的にといふだけではなく、支那全土でも珍らしい奇特な事として、旅行者などが時々、集美を見物に行くさうである）。春夫もまた集美に関心を抱き、鄭と一緒に廈門から舢舨（サンプ）に乗り込んだ。

二人は集美中学を参観の途中、校医と中国古典の講師を兼ねている陳鏡衡という人物に出会い、春夫を小説家と知ったその老詩人から一篇の七言絶句を贈られている。その詩は、（如雷灌耳有隆名／遊歷萍逢倒屣迎／小説警時君著／黑甜吾國愧難醒）と読めた。このとき春夫の眼前に

は、廈門市内で見た様々な光景が去来したのだと言う。

陳鏡衡の前掲の詩は、素よりただ形式的な一片のお世辞にしか過ぎない他奇の無いものではある。但、廈門に來て以來折にふれてさまざまなものを見たり聞いたりした私には——兵火の絶えない現下の国情やら、夜間に市街のすこし裏どほりを通れば行く先き先きで軒なみに行人を呼びかける私窩子の群れや、それらの私娼窟に雑つて所々にあるといふ阿片窟や、いかがはしい、それこそ意想外にいかがはしい画面の覗きからくりが、少年子弟の見るに任せて路傍で行はれてゐるのや、それから苦力が路傍の狭い空地に跼して小石と地面とを道具にして「行直」といふ遊戯の方法で賭博をしてゐるのは未だしも蕭洒たる洋館のなかに煌煌たる電燈の下でしかも路から見える二階のベランダに出て、金ぶちの眼鏡をかけた教育のありげな若い婦女子が括然として賭博に余念のないのを見たその同じ目で、「黑甜吾國愧難醒」を読むと、加之それが新しい文化の種をこの瘦地に蒔かうとする集美学校に職を奉じてゐる人の心から出たものだと思ふ時、この一句は必ずしも空虚ではないやうに思へて、一介の游子も亦彼の国のために彼の心事を憐むことが出来るやうな気がする。

《新しい文化の種をこの瘦地に蒔かうとする集美学校》の試みに対して、春夫はもちろん共感を惜しまない。だが一方、陳鏡衡の部屋を辞し、校舎を見学した春夫は、創立者兄弟の大きな写真が玄関先に掲げてあるのを見て途端に不愉快になる。《陳兄弟のこの学校もやはり、上海から俳優を呼び広東から仕掛火花を取寄せて人々の耳目を聳立たせる還暦祝とその目的に於て五十歩百歩の仕事に思へたからである。いや、この方が寧ろ邪気があるときさへ感じた》。つとに春夫は、華僑を主体とする地元資産家の別荘が立ち並ぶ鼓浪嶼で、贅沢な還暦祝の準備に余念がないある邸宅の庭を通り抜けている。<sup>注22</sup>春夫は集美学校設立の精神にもそれと同じ種類の、しかも公益をタテマエとするだけにより一層手のこんだ自己顕示欲を嗅ぎつけたのだと言う。

春夫が『南方紀行』で現代中国の諸事象を評価する際に共通して見られるのは、ある事業が結果としていかに公益の理念に適っているかということよりも、それを行う事業主<sup>注23</sup>に善意があるか否かを問う人格主義的な立場である。今一度「漳州」について見れば、《上海だとか広東だとかいふ外国人の手で出来上つた文明の市街を、彼等中華民国人自身の手でこの片陬の地に建てよう》という陳炯明の目標は、仮に自軍の兵士を養うための公共事業創出の側面があるとしても、近代化への自助努力に関心を寄せる中国民衆

の期待を背負う企画であつたことに変わりはない。だが、そのような一面は、《やはりこの男も山師かも知れない》という陳個人の人格に対する疑いによつて後景に退いてしまふのである。これと同様に、内戦・貧困・私娼・阿片・賭博の蔓延、そして風紀の乱れなどの頹廢状況の中で、その打開のために着手された教育事業への共感<sup>注24</sup>は、これ見よがしな（と春夫には見える）陳兄弟の二枚の写真によつて動揺する。

『南方紀行』の出版から十五年後、日中戦争が勃発した昭和十二年の『改造』十二月「南方支那号」に、春夫は「厦門のはなし」と題して再びこの旅の記事を寄せている。それは「漳州」の章とほぼ重なる内容を縮約した短文なのだが、《支那といふ国の真相を知る》ために依頼されて旅の記憶を手繰りよせる春夫の語り口は、『南方紀行』のそれとかなり異なっている。先に触れた陳炯明入閩の事情について、「厦門のはなし」では次のように解説されている。

収獲のすんだ後を見越して漳州に入つた陳炯明は、この平原地方の中心地の富裕で大に有為なところへ目を着けて来たことは言はずと知れてゐたが、いよいよその正体を發揮しはじめて、漳州の市街を大改築するといふ意嚮を示した。一体支那の新しい都市と言へば上

海香港その他皆、外国人の手で開かれたところで支那人自身の点で出来た新都が何処に一つあるか。これを自分が漳州に建設して中外に示さなければならぬといふ陳炯明の意嚮は壯んであるが、やがては富豪から大金をしほり出し、庶民に悪税を課さうとする前触れである。はじめから言はぬ事ではない、果して奴は立派な仮面の下に福建を荒しに來た曲せ者であつた。

〈一たい陳炯明の仕事は坊間では毀譽褒貶相半ばしてゐる〉という未知数の人物像が一種の魅力を放つていた『南方紀行』とは異なり、「厦門のはなし」にあるのはすでに、陳を疑う余地のない山師として断罪しようとする意図である。春夫はさらに続ける。

兵卒を遊ばして置いて給料を渡すのでは困るから民衆の仕事を兵卒のために見つけてやつて、それに對して徴収した金で兵を養ひ、序に上まへをはねるといふやり方なのであらう。損をする筈のない受負仕事をあとからあとから考案して行つて四百余州を巡業した末は一身代こしらへるばかりか人足が無暗とふえたころには一戦争をおつぱじめてアワよくば天下を取るやうな運を見つけるといふ段取になつてゐるのが支那の軍閥といふものらしい。(中略)漳州で支那軍閥のやり方を見て來てゐる自分は蒋介石の抗日もいづれは何か大

がかりな儲け仕事なのだらうとかねがね考へてゐた。

地方軍閥の一例に過ぎない陳炯明の都市政策に対する疑念が、そのまま北伐後の国民政府に対する評価へと一般化されているだけでなく、「蒋介石の抗日も」という形で全く別次元の問題にも及んでいる点にここでは注意を向けたい。それは本文の冒頭に近く、「毎度の事で、あの時は何が動機になつてゐたやら思ひ出しもしないが、排日氣分の濃厚な折で特に福建地方が甚しく、厦門はあれでも開港場だからさほどでもなかつたが、福州、泉州などは到底安心して旅行出来ない事が厦門で判つたので引返した事であつた。さうだ、何か福州で事件があつた後であつたらしい」と述べている所にも正確に對應する。福州事件(福州の排日運動に對する日台居留民の暴行事件)後の沿海各居留地に排日氣分が濃厚な折、厦門中國人社会のただ中に一人取り残されて、南華大旅社の夜に味わつた不安と孤独(第一章「厦門の印象」とは、「厦門のはなし」の中ではきれいに拭い去られてしまつてゐる。〈言葉の不通から双方で意志を判断し合ふ方法の全然ないことのはずみから、仮りに私が殺されようとも、さうして私の屍が海のなかへ投げ込まれても、全く、厦門では方法もないであらう〉とまで思ひつめた生々しい恐怖の感覺を切り捨てた所に「厦門のはなし」は成立してゐるのである。

もちろん、その萌芽が『南方紀行』の中に存在することは否定できない。陳炯明の漳州近代化政策や陳嘉庚・陳敬賢兄弟の教育事業に共感しつつも疑念を付す春夫の立場は、中国人自身の手による近代化能力を疑う「厦門のはなし」の立場へと発展して行く可能性を持っていた。この意味で、現代中国で見聞した有名無名の人物像を活写することに精力を傾けた『南方紀行』は、まさにその物語化の手法、すなわち状況理解よりも人物造形を焦点とした所に歴史資料としての問題があったわけだが、一方では、人物評価を指しながらも最終的な結論を先延ばしにするサスペンスにこそ、文芸としての紀行文の面白さがかかっていたことも争えない。次回以降も引き続き、史実と照らし合わせながら『南方紀行』という作品の独特の位置取りに関して、確認作業を進めて行きたいと考えている。

注1 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム 大正日本の中国幻想』（二〇〇三・七、中央公論新社）104～105頁に詳しい。

2 初出の「漳州」（『新潮』大10・8）では、〈厦門に於ける第十一日——旧暦六月十六日〉（新暦七月三十一日）とある。福建台湾での春夫の旅程については、作品内の情報を網羅的に整理した邱若山「佐藤春夫台湾旅行行程

考」（『稿本近代文学』一九九〇・一一）に詳しいが、その後の新出資料により再考の必要が生じている。この問題は稿を改めて考察したい。

作中の情報から逆算したこの日付にも疑問が残る。大正九年七月二十七日付の佐藤豊太郎（春夫父）宛書簡の記述には、〈明日は漳州と申すこの川上二時間のところを見物いたします〉と見え、これに依拠すれば、最初の漳州計画は七月二十八日だったことになる（『定本佐藤春夫全集』第36巻 二〇〇一・六、臨川書店、39頁）。

岡本要八郎（二八七六～一九六〇）は、北投石の発見で有名な鉱物学者。大正二年から昭和三年まで、厦門旭瀛書院長の任にあった。大正九年七月二十日付森丑之助書簡に、〈厦門へお遊びに行からるさうですが私の旧友で同地に学校経営に当り居る岡本氏なる篤学者が居られますから若しも同地に於て何か御用を生ぜし場合には御相談になれば全君は諸地の事情に通曉し殊に支那人間にも徳望のある人ですから屹度お役に立つこと、信じ此うちに御紹介状を入れ置ます必要の際に御行使下さる様願います〉（牛山百合子翻刻『佐藤春夫宛森丑之助書簡』二〇〇三・三、新宮市立佐藤春夫記念館、5頁）と見える。徐朝帆は台湾総督府国語学校の公学校農業教員課程を大正二年十月に修了、同じく余錦華は公学校師範部乙科を大正六年三月に修了した（『台湾総督府国語学校一覧』

大6・10、262・233頁。大正十二年六月の段階で両者と  
も旭瀛書院訓導職にあつたことまで確認済み（宮川次郎  
『厦門』大12・10、付録2頁）。許連城は、台湾総督府医  
学専門学校を明治三十九年に修了し（『台湾総督府医学  
専門学校一覧』大14・11、119頁）、漳州南門外大路頭に  
宏仁医院を開業していた（谷了悟『南閩事情』大8・6、  
台湾総督官房調査課、191頁）。いずれも実在の人物であ  
る。

5 八月三十日 援閩粵軍攻克福建漳州。「此間人民大多  
数表示同情于南方、南軍之行亦頗有秩序」（『民国日報』  
民国七年九月十三日）（段雲章・沈曉敏『孫文与陳炯明  
史事編年』二〇〇三・一〇、広東人民出版社、231頁）。

6 この箇所の通史的記述は、主に陳賢慶『民国軍閥派  
系』（二〇〇八・六、北京・團結出版社）の第八章「粵  
系」（137頁〜167頁）に依拠する。

7 大久保典夫「12佐藤春夫△南方紀行▽」（村松定孝・紅  
野敏郎・吉田颯生『近代日本文学における中国像』一九  
七五・一〇、有斐閣、87頁）。

8 外務大臣内田康哉宛「靖国軍ノ内訌ニ関スル件」（国立  
公文書館アジア歴史資料センター所蔵レファレンスコー  
ドB03050122300。以下同様）。

9 内田康哉宛「漳州ニ於ケル情况報告ノ件」一、宋淵源  
ト方声濤ノ衝突及粵軍一部ノ動員（B030501122

300）。

10 内田康哉宛「漳州ニ於ケル情况報告ノ件」三、安溪附  
近ノ交戦及漳浦方面ノ警戒（B0305035690  
0）。

11 南支情報第四五号「厦門事情（附雜件）」軍事一、南軍  
ノ内訌（B03050123500）。

12 南支情報第五五号「厦門事情」軍事一、在福建南軍ノ  
内訌（統報）（B03050123600）。ただし別資  
料によると、その被害は〈安海市民死六人、傷二十余人、  
被焼房屋二十七座、被劫三千余家、損失百万余元〉（安  
海郷土史料叢刊編委会編『風雲如磐話安海——民国時期  
地方史料輯録』二〇〇二年十一月、中国文聯出版社、707  
頁）とされており、死者の数に大きな開きがある。

13 浙江軍はもと北軍（北京政府側）の援軍として福建に  
派遣されて来たが、一九一八年夏に呂公望・陳肇英が南  
軍側に回り、陳の支持者として漳州に入った。『南方紀  
行』には漳州公園で見かけた將軍の一行について、同行  
者の余と徐とが、陳炯明が浙江軍の軍人かと噂し合う様  
子が描かれている。〈どうして。浙江軍の軍人が今来て  
ゐるのですか〉と僕は尋ねたが、別に浙江軍の將軍と決  
めるべき理由も無いやうであつた。余君と徐君とは時々  
こんな風に大した拠所のないことを考へては言ふ面白い  
人であつた〉と春夫は言うが、この反応はむしろ、南軍



の編成に関する春夫の側の知識不足を露呈している。

- 14 南支情報第六三号「漳州事情」軍事四、林祖密親兵ヲ編成セントス（B03050124300）。

- 15 春夫の言う〈許督蓮〉は、経歴から見て安海司令官の「許卓然」に該当する。許卓然（一八八五—一九三〇）

の出身地は泉州。廈門を拠点に辛亥革命に関わり、民国三（一九一四）年中華革命党福建支部を創設、六年閩南靖国軍を組織して孫文の護法運動（倒段）に参加した。

この間、袁世凱時代には廈門で反政府系報紙『声応報』

（元年）『民鐘報』（五年）を発行した。後に国民党員として福建勢力の糾合に尽力するが、十九（一九三〇）年に暗殺される（廈門市図書館編『廈門人物事典』（二〇〇三・六、鷺江出版社、166頁）。

- 16 注3に同じ。

- 17 〈漳州只有一間日報叫做「閩星日刊」又有一個半週刊、叫做「閩星」、同是一個機關所出的。從他們的言論看來、很像是傳播社會主義的、有人告我說、漳州是閩南的俄羅斯、拋此看來、却不能說此無因了〉「游漳見聞記 漳州文化運動的真相」（『北京大学学生週刊』第14号21面、民国九年五月一日）。

- 18 南支情報第二二二号「漳州事情」一、漳州ニ在ル陳炯明ノ抱負及其実行（B03050122600）。

- 19 〈漳州従前ノ市街ハ敷石道ナルモ旧式ニシテ凹凸甚タシ

ク到ル所階段ヲ有シ交通至テ不便ナリシモ陳カ高压的命令ヲ以テ之レカ改善ニ着手セシメ其費用トシテ沿道各商店間口一丈ニ付銀二十五元（即チ相對ニ軒ニテ五十元）ヲ出サシメ市區道路ノ改正ヲ勵行セリ〉（注18「漳州事情」）。

- 20

「漳州」では不親切な人物とされる徐朝帆・余錦華だが、半年前の福州事件が象徴するように、日中の板挟みになった台湾籍民の複雑な立場を考慮すべきである。民国九（一九二〇）年一月創刊の『閩星日刊』は盛んに排日記事を掲載していたし、五月四日（五四運動一ヶ年）には、漳州南門の寿民医院長・張春暉（台湾医学学校出身の漳州人）が日本製の医療器具・薬品の供出を拒否して腕力沙汰に及び、国民大会学生等の襲撃を受ける事件も起きていた（台湾軍参謀部・南支情報第五十七号「漳州事情」内政二、漳州ニ於ケル学生ノ横暴、大正九年五月二十七日、B03050123800）。このニュースは廈門にも伝わっていたはずであるから、二人が日本人の支持者と誤解されぬよう神経質になるのも当然であった。

- 21 『定本佐藤春夫全集』第36卷（二〇〇一・六、臨川書店、39頁）。

- 22

〈月夜の海岸を歩いてから山かげにある或る別荘の庭園を通り抜けたのだが、そこにはやつと人間が通れるだけの洞窟になった道を人工的に造つてあつて、その洞から

出るとすぐに二間ほどの石橋がかかつてゐて、その石橋の上に来ると夜気に雑つて蓮の匂が幽に漂うてゐた」(28-29頁)とされるこの庭園の名は『南方紀行』に記されていないが、民国二年鼓浪嶼港仔後海岸に造成された林爾嘉の別荘「菽庄花園」(現存)と推定される。ここには假山庭園と蓮池がある。林爾嘉(一八七五-一九五一)は台湾の巨大資本・板橋林家の一員で、下関条約締結後に父の林維源と鼓浪嶼に移住した。ただし民国(大正)九年当時は数え年四十六歳で、(還暦祝)の点から疑問が残る。春夫は他にも「觀海別墅」(現存)を訪ね、その主人・黄奕住(一八六八-一九四五)と会っている。両者は廈門市の電話・電燈・水道など都市インフラの整備に多大な功績を残した人物である。民国八年に発足した市政会では林が会長、黄が副会長を務め、この組織の主導のもと、九年に廈門都市改造の第一歩となる開元路の造成が始まった。『南方紀行』の中には、民族資本家である彼らの優雅な、あるいは贅沢な暮らしぶりの記述はあっても、その社会的貢献については言及がない。廈門の近代化はまだ始まったばかりだったのである。

『新しき村』の準備に取り掛かった武者小路実篤に対し、文壇大勢の冷笑的雰囲気は漂う中で、春夫が実篤ら白樺派を次のように評価していたことも、ここでは注目に値

する。(彼等が善を愛して居る、或は愛しようとして居ることが、本当の心持からであるか、偽善者のやうにであるかを、よく考へて見てやるべきである。さうして、勿論彼等は本気で、心からさうしようとして努力して居ることは確かである——やうに私には思へる) (武者小路実篤氏に就て) 原題「彼等に感謝する」『中央公論』大7・7、全集19巻71頁)。

付記 『南方紀行』の引用本文は、初収刊本『南方紀行』(大11・4、新潮社)を底本とする『定本佐藤春夫全集』第27巻(二〇〇〇・一一、臨川書店)に基づいた。文中の傍点はすべて稿者(河野)が付したものである。

なお、本稿は二〇〇九年度、東京大学に提出した博士学位請求論文『佐藤春夫研究』の第七章「佐藤春夫にとっての中国——一九二〇年『南方紀行』の旅の虚実——」の一部に加筆を行ったものである。また、本研究は、平成二十二年度科学研究費補助金・若手研究(B)の助成を受けている。

(ここの たつや・実践女子大学専任講師)